

英米文化学会会報 第28号



SES NEWSLETTER

英米文化学会編集委員会

◆英米文化学会第14回大会のお知らせ(既報)

標記の大会を下記要領にて開催します。

開催年月日：平成8年8月23日(金)・24日(土)

場 所：長野清泉女学院短期大学(長野市上野2-120-8) 長野駅からタクシーで2,000円程度

宿泊場所：三井ガーデンホテル長野※ 電話 026-225-1131 長野駅善光寺口から徒歩7~8分

大会日程

第1日 8月23日(金)

13:30 受付開始

14:00-14:10 挨拶 英米文化学会会長 名和 雄次郎

長野清泉女学院短期大学学長 清水 宏子先生

14:10~16:30 研究発表

19:00~21:00 懇親会 会場：三井ガーデンホテル長野

会費：6,000円

第2日 8月24日(土)

10:00 受付開始

10:30~14:00 研究発表

14:30~16:00 講演 演：深井 宏一(立正大学教授)

演 題：現代英語文のレトリック ―日英語の静態と動態

当日会費：会員 1,000円 一般 500円 学生 300円

※ホテル宿泊と懇親会出席の費用の申込締切は8月8日とさせていただきます。代金振込方法は会報第27号をご覧ください。なお、費用の振込が間に合わない場合には事務局佐藤先生までご連絡をお願いします。

第14回大会事務局：佐藤英語研究室 〒101 千代田区神田駿河台1-8-13 日本大学歯学部

電話 03-3219-8160(直通)

◆事務局から

1. 8年度・9年度の例会・大会の開催予定等について

英米文化学会は平成9年にめでたく三十周年を迎えるにあたり、種々の記念行事などを計画しておりますので、平成9年度までの予定が早めに決定しましたのでお知らせいたします。

☆学会暦(平成8年度)

平成8年8月23日・24日 第14回大会

平成8年11月16日 第92回例会

平成8年3月8日 第93回例会

☆学会暦（平成9年度）ならびに三十周年記念事業

- 平成9年6月14日 第94回例会（通常の形式の例会）
 平成9年9月6日 第15回大会（三十周年記念講演があります）
 平成9年11月15日 第95回例会ならびに記念式典とパーティー

2. 第14回大会の割愛願いについて

長野清泉女学院短期大学にて開催される大会に参加希望の会員で、学会発行の割愛願いが必要な会員は事務局までご連絡ください。郵送させていただきます。宿泊希望を募りましたが、可能な場合もございますので、今から宿泊希望が出ましたら事務局までお問い合わせください。大会期間中は、事務局佐藤治夫の携帯電話 030-90-51280 が通じておりますので連絡などありましたらご利用ください。また、開催校事務室への電話は迷惑となりますのでご遠慮ねがいます。

3. 日立ソフトよりの電算機購入の終了

先にお知らせをいたしました日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社による電算機販売は6月末をもちまして締め切らせていただきました。

4. ホームページが動いています

学会の機能の一部のインターネット上への移行は今後も続きますので、アクセス可能となった会員は、学会のホームページをご覧ください。かなり充実した内容となっております。非会員へもURLをお教えいただければ幸いです。内外の各種の検索機関にも、英文学、米文学、言語学、英語教育、英語文化、英米文化学会などのキーワードにて登録してあります。

<http://www.threeweb.ad.jp/~shakey23/>

となっております。

ご勤務先の学校のホームページが立ち上がりましたら、紹介させていただきますのでメールにてURLをお知らせください。また、事務局佐藤 (shakey23@tky.threewebnet.or.jp) まで、確認のためのメールを入れてください。会員のホームページへのジャンプも可能となっておりますので会員がホームページをお持ちになった場合は、事務局までご一報いただければ、然るべくリンクを張らせていただきます。

・リンク先募集中

ホームページの中に入れた方が良いと思われるサイトなどありましたら、お知らせいただければ幸いです。検討の上、リンクを張らせていただきます。

◆学術委員会から

『英米文化』第27号の原稿締切は10月末日ですので『英米文化』第26号巻末の投稿規定に従って下記宛にご投稿ください。原稿末尾に所属先（勤務校等）とフロッピーの添付の有無を明記の上、封筒に「英米文化原稿」と朱書してください。なお、投稿負担金は、1頁あたり3,500円（手書き原稿）、3,000円（フロッピー添付）です。（相良英明） 原稿送付先： 相良英明 〒158 世田谷区深沢2-14-23

◆第14回大会研究発表レジメ

1. シェイクスピアとモグラ

ー トプセルの『動物誌』（1607）に関連して

山根 正弘（創価大学）

シェイクスピアの戯曲では、頻繁ではないにしても一再ならず ‘mole’ という言葉が使われている。そしてその比喩的なイメージとしての使われ方は様々である。例えば、*Hamlet* では、モグラは亡霊への呼び掛けと

して使われている。*Pericles* では、モグラが盛り土をする行為（その結果「モグラ塚」が出衆上がる）は、暴君に対する反抗を象徴している。また、*The Tempest* においては、モグラは聴覚が鋭いと当時の俗信により、そのスパイ行為が暗示されている。今回の発表では、当時ロンドンで出版された百科全書的な博物誌、Edward Topsell の *The Historie of Foure-footed Beastes* におけるモグラの記述を拠り所に、あまり日の目を見ることのないシェイクスピアのモグラに注目して、そのイメージの用い方を吟味したい。

2. 黒人映画

——政治的マイノリティと文学的マイノリティのはざままで

越智 敏之（工学院大学）

黒人映画とは黒人監督がハリウッドのような体制にたよらず、独自に資金をかき集めて制作する映画のことだ。1979年に制作された *Sweet Sweet Back* が最初の作品だ。代表的な監督としては、例えばスパイク・リーがいる。

黒人映画がハリウッドから独立して存在する理由は、多分に政治的なものだ。映画界における白人支配を支えるハリウッドでは、登場する黒人が白人にとって都合のいい存在としてしか描かれず、観客である現実世界の黒人までもが、白人の体制が作り上げた黒人像を通して支配されてしまう。黒人の精神面での独立を勝ち取るには、どうしても黒人映画が必要だったわけだ。

しかし黒人映画を発見させた政治的理由が、現在黒人映画を縛っているように思える。今回の発表では、黒人映画が突き当たっている壁を作品を通して検証していきたい。

3. トマス・ホップズの家族観について

小林 弘（東京理科大学）

トマス・ホップズ(1588～1679)の生きた時代の祖国イギリスは内乱状態であった。その無秩序なイギリスを立て直すために、彼は『リヴァイアサン』を書き、政治指導者たちに彼の国家理論の援用を求めた。しかし彼の国家理論は援用されるどころか、彼に対する激しい非難の声を生んだだけであった。そうだった理由の一つは、人間を、地面から生えてくる「きのこ」のように親のいない親族もない人間と捉えた彼の人間観にあった。親なしには子が生まれないのであるから親のいない天涯孤独のような人間像は、常識的には異常である。彼が異常な人間像に絞り込んだわけは、人間を権利（自然権）の主体でありかつ国家の基本単位にするために、生身の人間ではなく個として抽象化された人間を論じたからであった。それでは彼は生身の人間を全く論究していないのか。彼は結婚や「家族」について論じている。そこでは「夫婦関係」、「父子関係」、「母子関係」などいわゆる家族構成が論究されている。家族は、「父権家族」である。彼は生身の人間を論じているのである。そうすると、生身の人間が作る「父権家族」と抽象化された人間が作る「国家」とはどんな関係があるのだろうか。また生身の人間と抽象化された人間とは、ホップズのなかではどのように整合しているのか。これらの論点を「トマス・ホップズの家族観」として言及する。

4. 『ロミオとジュリエット』におけるマキューショーの役割 石原 万里（福島工業高等専門学校）

マキューショーは『ロミオとジュリエット』の劇の進行において、皮肉な役割を負っている。マキューショーはロミオがジュリエットに恋したことも知らなければ、二人がひそかに結婚したことも知らない。ロミオが変わってしまったことを感じながらも、それがどうしてかわからない。そのため、マキューショーはロミオのためを思って行動しているのに、逆にそれが、ロミオを窮地に陥れ、悲劇の発端となる。

マキューショーの惹かれたなか、ホモセクシャリティーがなかったとしても、劇中の彼の役割にそれが認められはしないだろうか。女性に恋心を抱くロミオが男同士のグループからひとり抜け出て行動し始める時、マキューショーは不安になる。マキューショーにとって、ジュリエットは恋敵のような存在なのである。そしてロミオとジュリエットが二人の世界を築き始めるとき、マキューショーは劇からほうり出されてしまう。

5. ヘンリー・ジェイムズとウィリアム・ジェイムズ

—文学と哲学のあいだ—

大東 俊一 (法政大学)

ヘンリー・ジェイムズは心理学者のように小説を書き、ウィリアム・ジェイムズは小説家のように心理学を書いた、とよく言われる。もとより文学と心理学および哲学がその完成形態においては全く別物であることは言うまでもないが、両者の間には何らかの交流が成立しうることもまた確かである。この兄弟は、公表を前提とした著作の中では互いに言及することは避けているが、書簡においてはお互いの作品の評価を率直に述べている箇所もある。この発表では主としてヘンリーの *The Art of Fiction* とウィリアムの *Pragmatism* とを比較し、両者の類似点を明らかにしていきたい。

6. リスニング教材に見られるインプットの変遷

柏木 厚子 (昭和女子短期大学)

英語教育において、実際的な英語の運用能力を伸ばすことの重要性が強く認識されているこの頃、リスニング教授に対する関心は非常に高く、また市場には多様なアプローチの教材が氾濫している。この研究発表では英語教授法が大きく変わった過去20～30年の間に、リスニングの教授法はどのような変遷をたどったかを、特にインプット (リスニング教授法を検討する際には、常に2つの要素、インプットとタスク、を頭におかなければならない) に焦点をあてて考察したい。

◆会員による出版物のお知らせ

1. 成田敏彦『音声英語への科学的アプローチ—English as an International Language』(成美堂) 1,600円
テンポの速い文レベルの発音・・・脱落現象、同化現象、リエゾンなどを扱っています。
2. 宮本正和『ハムレット—オフィーリアを恋して—』(こびあん書房) 2,200円
読むたびに新しい意味を持ち始めるのだが、この辺で、その一過程を自分なりの視点でまとめてみた、と「あとがき」で述べておられます。(名和雄次郎)

◆会員による出版物の内容紹介

渡辺節子編『とってもかんたんマイレシビ STONE SOUP』(講談社インターナショナル)

おふくろの味、わが家の料理といったどこにもあるが、それぞれ微妙に違う味を160も英訳付きで紹介している楽しい料理の本といってしまうえばそれまでであるが、この本の各レシピには、文京女子短大の学生一人一人と編者渡辺節子先生とのきめ細かい準備と話し合いの成果というもう一つの味が加わっている。さらに、伝統的な家庭の味を英語で紹介することによって、身近な日本の食文化を通して、国際交流の一端を提供するという味付けもされている。編者の狙いが、家庭料理という身近な題材を用いて、外国人とのコミュニケーションを円滑に進めることにあるとすれば、その狙いもみごとに達成されている。この本は使い方を工夫すれば、すぐれたコミュニケーションの教材ともなるであろう。タイトルに使われたSTONE SOUPのように、この本そのものが多彩な味と特色とを備えている。この本を片手に、実際に料理を作りながら、日本人と外国人が親しく交流する姿が目浮かぶようである。このような楽しく、かつ、有意義な本を作った学生の努力と編者のみごとな企画と構成力に心から敬意を表する。(高取 清)

英米文化学会会報 第28号 編集・発行: 英米文化学会編集委員会=池田 広子、小川 喜正、

岸山 聡、武井 明子、中村 豪、宮崎 敬子、山根 正弘

発行責任者: 中村 豪 示